

かかし

田野の昼間の風景とそのようすを、詩人は美しい詩により、画家は生き生きと絵に描きます。夜になると、詩人はお酒を飲んでぼろ酔い気分となり、画家は楽器をかき抱いて低い声で歌い、どちらも田野にやってくる時間はありません。では、田野の夜の風景とどのようなようすを教えてくださいませんか？ います。それはかかしです。

キリスト教では、人間は神の手によってつくられたものだそうです。この言葉が正しいかどうかはひとまず置いておいて、それをまねて言ってみるならば、かかしは農民の手によってつくられたものと言

つて、いやけがさしたことはなく、牛のように横たわって空を見たりせず、また、犬のように走りまわって、遊びに夢中になったりもしません。彼は静かに田んぼを見ていて、手のうちわを軽くゆすり、新しく実った稲穂を食べようと飛んできたスズメを追っ払っています。彼は食事をすることも、眠ることもなく、ちよっと座って休むことすらせず、いつでもそこにまっすぐ立っています。

これは当然のことですが、田野の夜の風景とようすは、かかしだけが、いちばんはつきりと、いちばんよく知っています。彼は露がどのように草の葉につき、露の味がどんなに甘いかを知っています。彼は星がどのようにまたたき、月がどのように笑うかを知っています。彼は夜の田野がどんなに静かで、草花や樹木がどのようにぐっすりと眠るかを知っています。彼は小さな虫たちがどのように追っかけてこをし、チョウがどのように愛を語るかを知ってい

えます。その骨格は竹林に生えた細い竹で、筋肉と皮膚は古くなった黄色いわらです。穴のあいた竹のかご、残ったハスの葉、どんなものでも帽子にすることができません。帽子の下にある顔はのっぺらぼうで、どこが鼻か、どこが目か分かりません。手の指はないけれど、ぼろぼろのうちわを持っています。

——実際には持っているとは言えず、うちわの柄に糸を結んで、手にかけてあるだけです。彼の骨格はとても長く、足の下にもまだあって、農民はこの部分を田んぼの真ん中の泥の中に差しこんでいて、かかしは昼も夜もそこに立ちつづけているのです。

かかしはとても責任感が強く、牛と比べたら、牛のほうが彼よりもはるかになまけもので、時に地面に寝そべり、頭を上げて空を見えています。犬とかかしを比べたら、犬のほうがいたずらで、時にそこらじゅうを駆けめぐり、主人はあらゆるところを探しまわって、くたくたになります。かかしはいまだか

ます。つまり、夜のすべてを彼ははつきりと知っているのです。

これから、かかしが夜に見たいいくつかのことをお話ししましょう。

満天に星が輝くある夜、彼は田んぼを見守りながら、手のうちわを軽くゆらしていました。新しく出た稲穂がずらりと並び、星に表面を照らされ、少し光っていて、頭に水の玉をのせているようです。少し風が吹くと、サラサラと音をたてます。かかしは見守りながら、とても喜んでいました。今年の収穫はきつとかかしの主人である、かわいそうなおばあちゃんを喜ばせることでしよう。彼女は今まで笑ったことがあるでしょうか？ 八、九年前、彼女の夫が死に、彼女は思いたすと泣きだしてしまいうため、目がいまでも真っ赤なままです。また、そのせいで、ときどき涙が出ます。彼女には息子が一人しかおらず、親子二人で苦勞してこの田んぼを耕して

三年が経ち、ようやく彼女の夫の葬式代を返すことができました。しかし、まさか息子がジフテリアにかかり、つづいて死んでしまうとは思いませんでした。彼女はそのとき、倒れてしまい、その後心の痛みによつちゆう悩まされることになりました。今度は彼女が一人残され、年老いて気力もないのに、力を振りしぼって田んぼを耕さねばならず、ようやく三年を耐え忍んで、息子の葬式代を返すことができたのです。

しかし、その後二年続きで洪水がおき、稲が水に浸かりましたが、腐らずに発芽しました。彼女はさらに涙をたくさん流したので、目が傷ついてしまい、ものがはつきり見えなくなり、ちよつと遠いところのものは、まったく見えません。顔はしわだらけで、ひからびたミカンのようで、笑みなどを浮かべる余裕はありません。でも、今年の稲は成長がよく、しっかりとっていて、雨もあまり多くないので、豊作の

ように思われます。だからかかしは彼女の代わりに喜んでくれるのです。刈り入れの日、収穫した稲穂が大きく、ぶつくりとしているのを見て、これがすべて自分のもので、努力は無駄ではなかったと彼女が思えば、顔のしわも伸びて、安心して満ち足りた笑顔を浮かべることができるよう。もしほんとうにその笑顔を見ることができれば、かかしにとって、それは星や月の笑みよりもすてきで、貴重なものです。なぜなら、かかしは主人のことを愛しているからです。

かかしがまさにそう考えているとき、一匹の小さいガが飛んできました。灰色の小さなガです。彼はすぐさまそのガが稲の天敵、すなわち主人の敵であると見て取りました。自分の務めから見ても、主人に対する感情から見ても、この小さいガはすぐさま追い払わねばなりません。そこで、彼は手に持ったうちわをゆらしはじめました。でもうちわの風は



小さく、ガを怯えさせることはできません。その小さなガはしばらく飛んでから、まるでかかしが期せずしてそこにガを追い払ったかのように、一枚の稲の葉にとまりました。かかしは小さなガがとまったのを見て、あせりました。でも彼の体は樹木のように泥の中に固定されていて、動くことにも前に半歩も動くことはできません。うちわはゆれていますが、その小さなガは相変わらずのんびりと休んでいます。彼は、今後田んぼの中がどのような状態になるかを考え、主人の涙とやせ細った顔を考え、また主人の運命を考えて、心が真つ二つに割られたように痛みました。でもその小さなガはずっと休んでいて、どう追い払おうとしても、まったく動きません。星々がみんな去っていき、夜景がすべて隠れて見えなくなるころ、ようやくその小さなガは飛び去りました。かかしがその稲の葉をよく見ると、果たして葉っぱが巻きあがり、その上には小さいガの

卵がたくさん残されています。かかしはこのうえない恐怖を感じ、災難が本当にやって来たら、恐ろしいければ恐ろしいほど避けて通れないと思います。かわいそうな主人は、目がよく見えないので、なるべく早くガの産んだ卵を見つけさせなければ、たいへんなことになります。かかしはそう考え、うちわをさらに激しく動かししました。うちわはたびたび体にあたり、パンパンという音を立てます。かかしは叫ぶことはできませんので、これが唯一主人に警告する方法なのです。年若い女性が田んぼにやってきました。彼女は腰をかがめ、田んぼの水がちょうどよいか、川からさらに水を引く必要がないか確かめました。また自ら植えた稲が、みんな丈夫かを見て、稲穂をさわって重いことを確かめました。そしてさらにかかしを見て、帽子をきちんとかぶっていて、うちわが手にあってゆれているか、パンパンという音を出し

ているかどうか、真つ直ぐ立っていて、位置が変わったり、ようすが変わったりにないか確かめました。彼女はすべてがいい状態であると思いい、あせり上がって、縄をなうために家に戻ろうとしました。かかしは主人が帰ろうとしているのを見て、あわてふためき、しきりにうちわを動かして、この切迫した音で主人を引き留めようと思いました。この音はまるでこのように言っているかのようでした。

かっていきます。彼はひどくあせって、ひたすらうちわを動かしつけましたが、主人の姿が見えなくなり、警告が役に立たなかったと知ったのです。かかし以外にはだれも、稲の心配をする人はいません。彼は飛んで行ってその災いの種を消したくてたまりませんでした。また、風で便りを送り、主人にすぐに来てもらって、災いを取り除いてもらえないのを、残念に思いました。彼の体はもともとやせ細っていますが、今は憂いのために、さらに憔悴して見え、もう立っている力すらなく、ななめに傾き、腰をかがめ、まるで病気のようになりました。

「ご主人さま、行かないでください。田んぼのすべてが問題ないと思わないでください。たいへんな災いが、田んぼの中にもう根を下ろしているのです。一度起こるともう收拾がつきません。そのときには、あなたの涙は枯れ、心が砕けてしまってください。今のうちに火だねを消せば、まだ間に合います。ここ、この一株です。この稲の葉先を見てください！」彼はうちわの音で続けて警告を発しました。でも老婦人はまったく理解することなく、一步一步遠ざ

かえり、そこらじゅうウジだらけになりました。夜ふけのしんと静まりかえったとき、かかしは彼らが稲の葉をかじる音を聞き、彼らのますます食いしん坊になった顔つきも見ました。しだいに稲の緑の葉がまったく見えなくなり、くきだけが残りました。